野生と生きた８８年

高橋　清　（29C 応化）

望月恭一さん（35C）に最近の僕の野生保護の仕事を紹介して頂いたが、一寸、日本国内と異なるカナダでの生活の中の、特に記憶に残る部分を、その記憶が薄れる前に、編集部のお許しを得て何回かに渉って紹介してみようと思う。

僕は、大間々町（今のみどり市）に７人兄弟の末子、五男として沢山の兄、姉と、町で知られた和菓子屋の父、大家族を支える優しい働き者の母に育てられた。

大間々　高津戸峡

子供の頃から和菓子造りを手伝って父から重宝されたが、今は亡き、群大の前身、桐生工専を卒業した次兄の影響を強く受けて、中学生の頃から電気機器が好きになり、桐生高校に入る頃には、菓子造りの合間に、良く近くの電気屋さんに入り浸って色々なことを教わり、小型のラジオが組み立てられるようになっていた。従って高校時代は、東京の電気通信大学を望んでいたのだが、卒業も迫り、いざ受験の時になると、直ぐ上の兄が東京の予備校に通っていたため、父から、お前は地元の大学に行けないか、と生まれて初めて、命令でなく優しく問われ、何の抵抗も無く群大受験を決めた。

あの頃は将来の事などそれ程気にせず、行き当たりばったりの、言い換えると「何でも興味がある」という軽い気持だけで、父から、菓子屋になる気はないか、と聞かれれば、「大学を一回だけ受けて、駄目だったら菓子屋になる」と約束した程だ。したがって、他の多くの友人と異なり、入試勉強に特に熱を入れた訳でも無く、夜机に向かっても絵ばかり書いていた。母から、「キヨシ、勉強しなくていいのかい」と何度も言われたことを昨日のように覚えている。僕は、”今は目の前にあることに集中する”と考えて、日常は父の手伝いをしてかなりの所まで和菓子造りが出来ていた。

桐生高校卒業記念

群大の受験は、その出来栄えは覚えていないが、無事に終わった。高校の友人達は皆その発表に気を揉んでいたが、僕は全く気にしないで、発表も見に行かなかった。ただ、なる様にしかならない、と思って気楽に構えていた。

その日、我が家の店番をしていると、昼頃、高校の友人が駆け込んで来て、「キヨちゃん、受かったよ」と叫んだ。僕は思わず「誰が受かったの」と聞き返した。その親しい友人も合格して居た。母は直ぐに、「自分で行って見ておいで、一生に一度だよ」というので、上毛電鉄に乗って大学に見に行った。門の脇に張り出された大きな板に紙が貼られ、沢山の名前がイロハ順だったか、アイウエオ順だったか覚えていないが、いずれにしても僕の名が真ん中頃にあった。そして予期に反して、感動を味わった。急にお腹が空いている事に気付き、西桐生駅の近くの蕎麦屋で、生まれて初めて独り蕎麦を食べた。この蕎麦屋はそれ以来、時々大学からの帰路に立ち寄るようになったものである。

父の山菜採りや釣り好きを通して覚えた山登りに凝り始めていた僕は、入学前に早速友人を誘って、我が家の僕の部屋からいつも見ていた、皇海山の登山を試みた。まだかなり雪の積もる道と悪天候に災いされて、途中で日が暮れ、そそり立つ岩の洞穴で、火を焚いて、大学生活を語り合いながら野宿した夜を未だにはっきりと覚えている。そして数日すると入学式であった。

僕は当然の事として電気科を目指した。大学の授業が始まって直ぐ、哲学の講義の時の起きた事件は、今も昨日の出来事の様に思い出す。

群馬大学工学部　校舎
（現在の「同窓記念会館」）

大講堂で一年生全員が出席したと思われる大人数のクラス、未だ新しい級友の出来ないその群れは、出身校別に固まって席に付いた。恥ずかしながら課題が何であったか、教授のお名前さえ覚い出せない粗末な記憶の中で、日本の歴史の話題の中、教授が「子無きは去る」と言った。すると僕の横に座っていた高校時代の親しい同級生が、大きな声で「子が無いと、なんで『猿』になるんだ？」と、言ったのです。僕は思わず、「馬鹿者。。。」と大声で言いかけると、時すでに遅く、教授は僕を指さし、「廊下に出て、外で待って居ろ」と、有無を言わせず外に突き出された。それから一時間半後、授業が終わり、学生も去ると教授が出て来た。僕は不正な言葉をお詫びして、成り行きを説明すると大笑いとなり、「それでは犯人は君では無く友達だったか」と言われて一件落着した。以来僕は哲学の時間には周りに友人が居ない事を確かめてから席を取った。

ところで、僕は生まれつき、算術に弱い。何も考えずに電気科と決めていたが、いざその授業に出てみると、黒板を埋め尽くす数字と線と点、２度ほど授業に出て心

が固まった。早速事務室に出向き、目標の科を変えたい相談をすると、丁寧に質疑があって、数学が余り扱われない化学工業科という今まで殆ど知らなかった長い名前の科を勧められた。後でわかったことだが、概要によると数字の代わりに、ＯとかＨとかＮとかＳとかとという様な沢山の記号が出てくる。数字よりは面白そうだとわが身に言い聞かせて、徐々にその原子記号に熱中して行くこととなり、僕の社会人生が決まった。

仙之倉山荘合宿（１年生）

もう一つの僕の関心は野球、高校時代は投手をして自信があったので、課外活動では野球部に入り、早速投手をしたら、２回でノックアウトを食い、すぐに部を辞めた。

荻原研一同（4 年生）

閑話休題、そして野球部とは縁もゆかりもない、でも当時すでに熱中していた山登りを続けるべく、山岳部を選んだのである。山岳部生活は僕の大学生活の課外の基礎となり、その経験は化学と並んで、結局僕の一生を決めることとなった。

話を元に戻すと、群馬大学工学部に昭和２５年（１９５０年）春入学、下田教授の下で製紙工学と、荻原先生からは、それに関連した近代科学の基礎になる高分子化学を学んだ。学生生活後半、荻原教授の気の張らない指導と、特に興味を掻き立てた合成実験、そして勉強以外の時間は大好きな山岳部活動、今８８歳の生活に直結した学び舎の興奮と自然に浸る時間は、米寿の我が人生を何と潤してくれていることかを実感して、今も幸せを実感している。この４年間の充実した、学問と趣味に浸る生活は、その後の社会生活、そして特にカナダに移住後の生涯の基礎を何と見事に実らせてくれたことだろうか。

－続く－

（２０２０年7月1日）